たたみにひとつ
べに、ひとつ
忘れたのか、残したか
窓に落ちた
ぎんぎらに
まっ赤に染まった
日の涙
すさんだ心で唄うじゃないが
ロック、ロックでまっかっかっかっ
ロック、ロックで日がしずむ

まっかっかロック

林静一

とに
すさん
うたう
な
ろっく、
かっか
く、ろっ

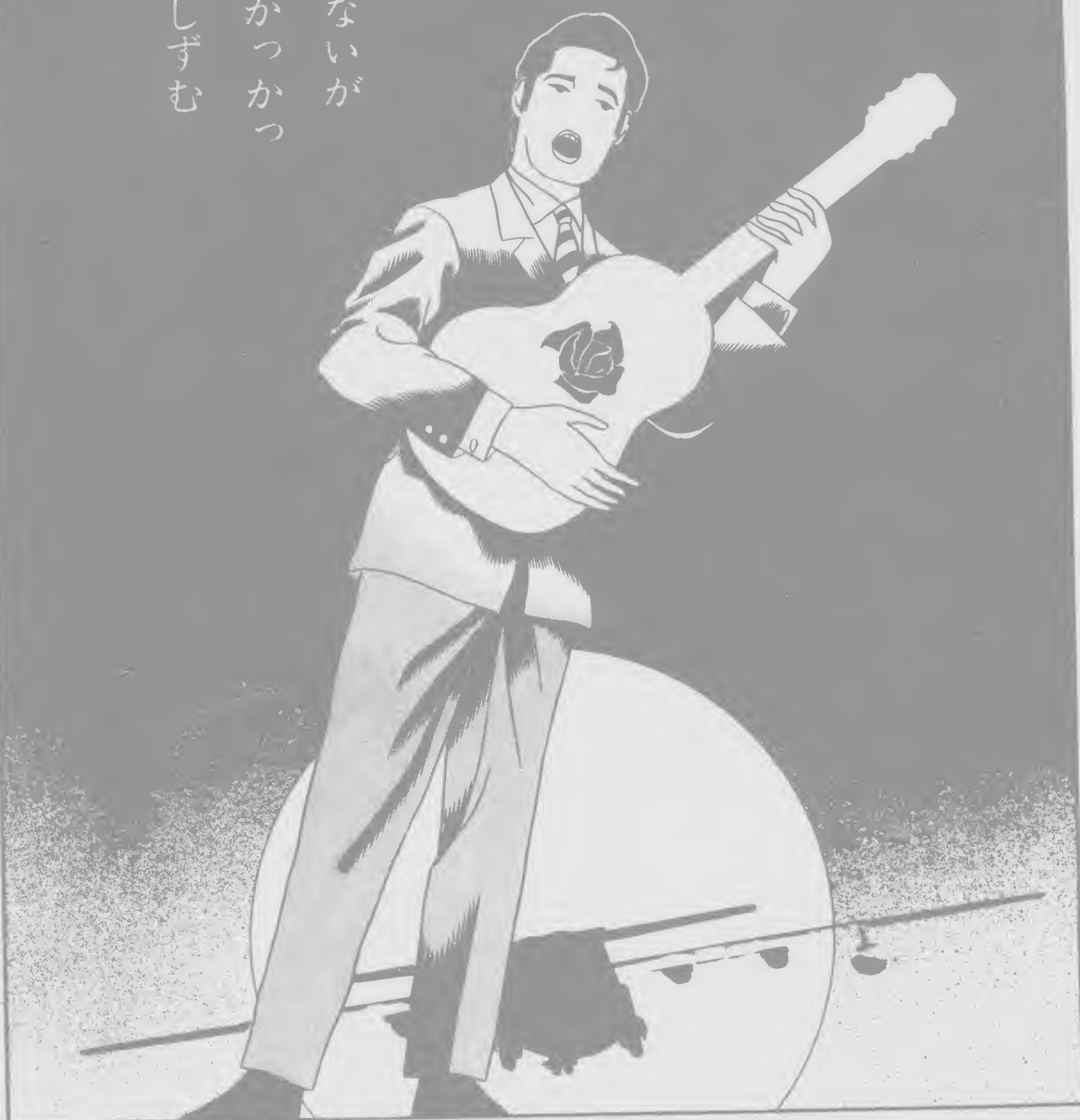
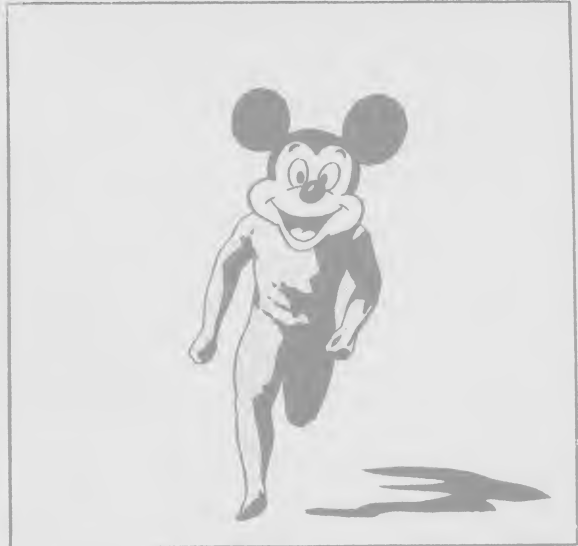
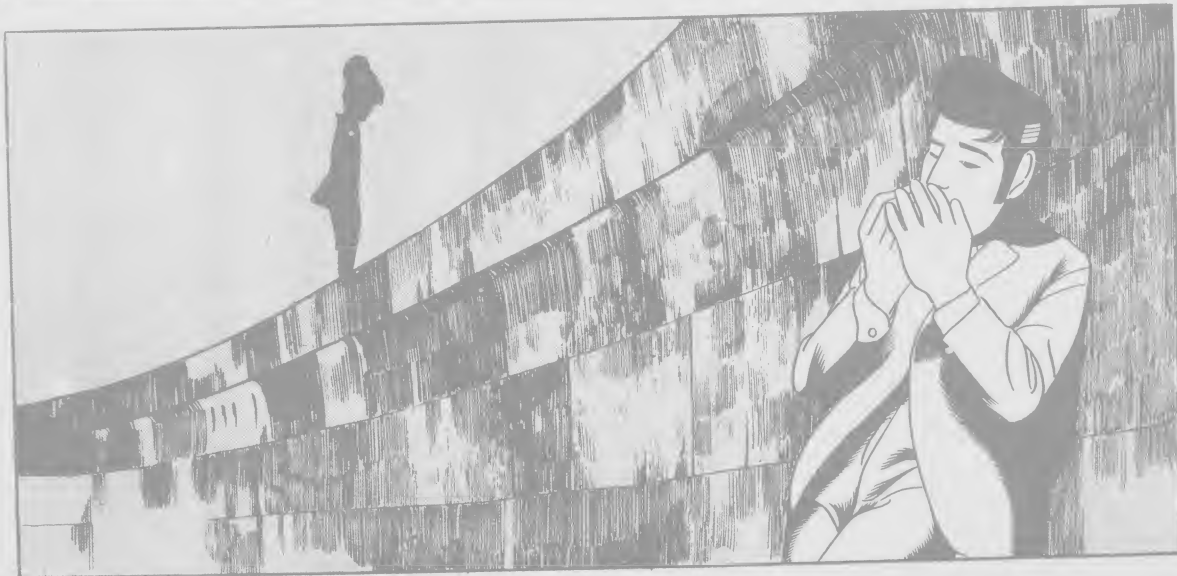
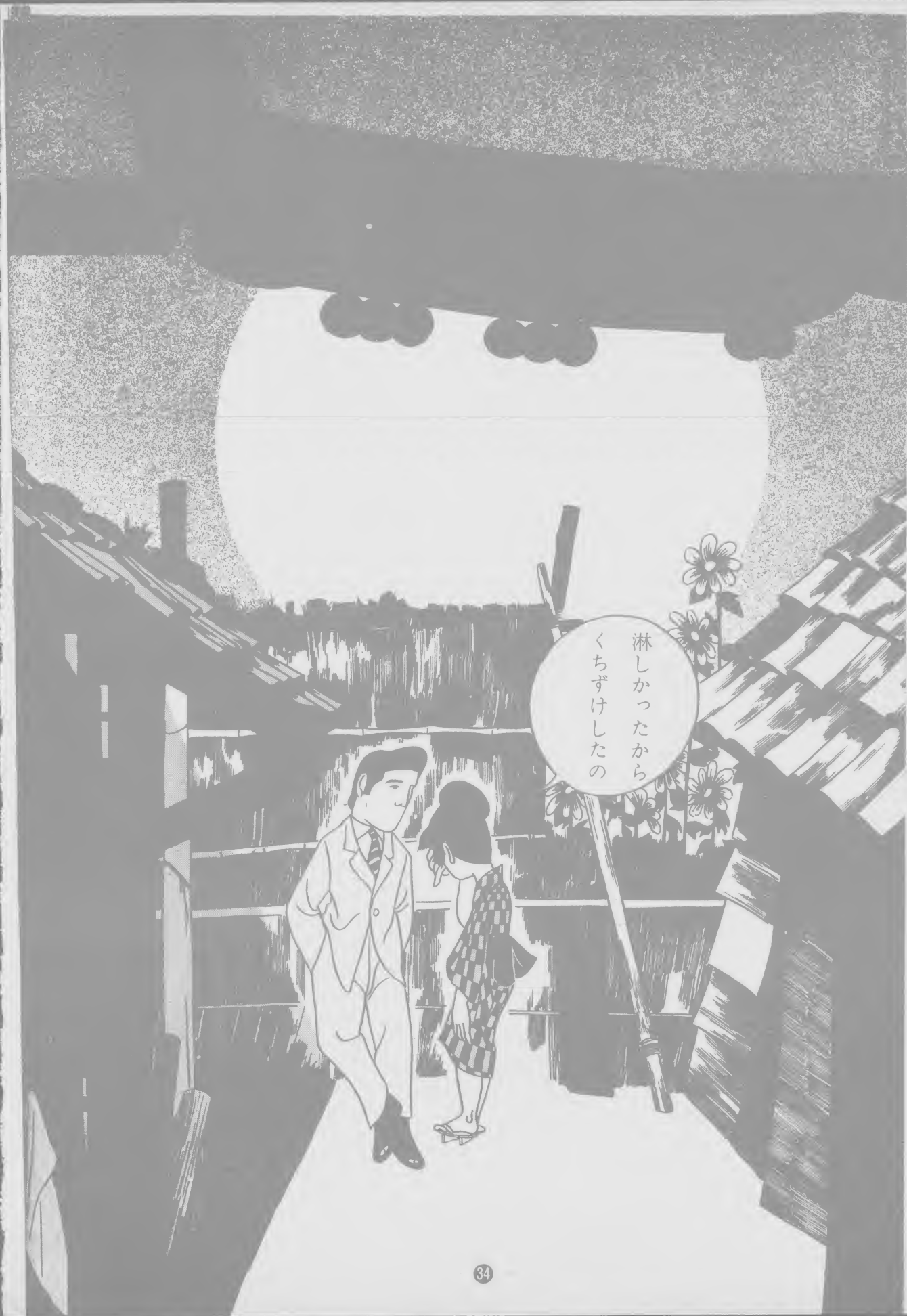
ねえ~
あたいに
歌っておくれ

心は
すぐ
かわる

だけど……

あなた
あなた
ああ
すべてが
あなた あな

淋しかったから
くちずけしたの

いきて ゆく わたしだけ
しんでゆくのも わたしだけ
いつか いちどを
まちましょう

花のホールで踊っちゃいても
春を持たないエトランゼ
男同士の
相合傘で
あ〜あ、あらし呼ぶよな
夜が更ける

おぼえているかい

ロックロック
唄ってた頃を

ピーーッ

ほら
私の作ったあの曲
君がその…
オウオウいや
イエイエだ

それが
セクシィだって……
ハハハハ
あの娘が
いってたっけ…

君がいない
三十六号室は
さみしい
ふるさとにもいったよ
ハマナスが咲いて
いた……

キュ――ン

二人の
コーヒーと
トーストさえ
凝視した
その朝

君は
何を見たの
あの窓から
見える
坂の上に……

あ〜あ
君が
この様にするなんて
何年ぶりだろう
うれしくて……

くっくっ
くっくっ

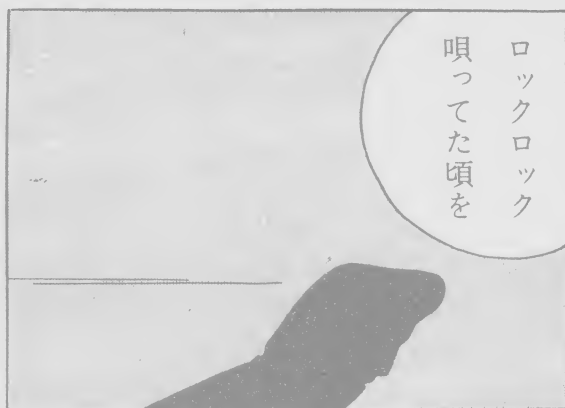
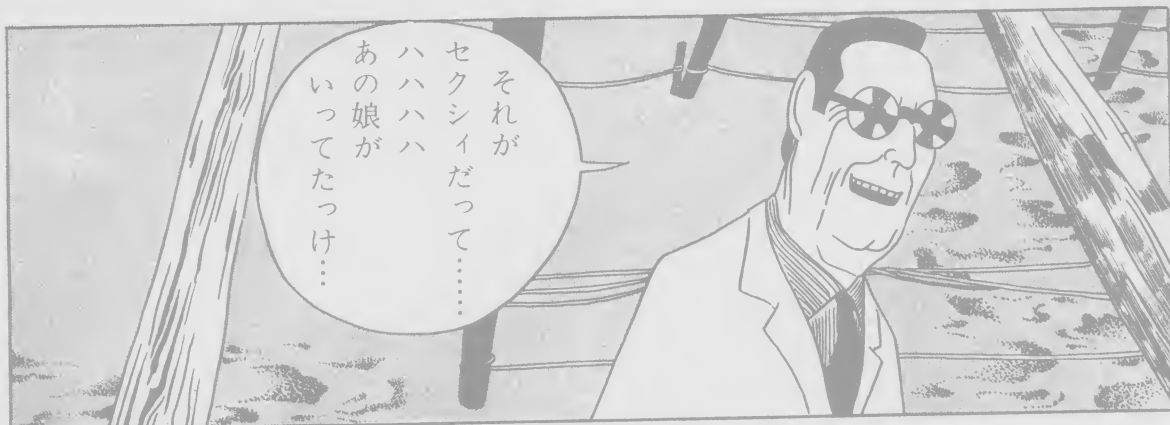
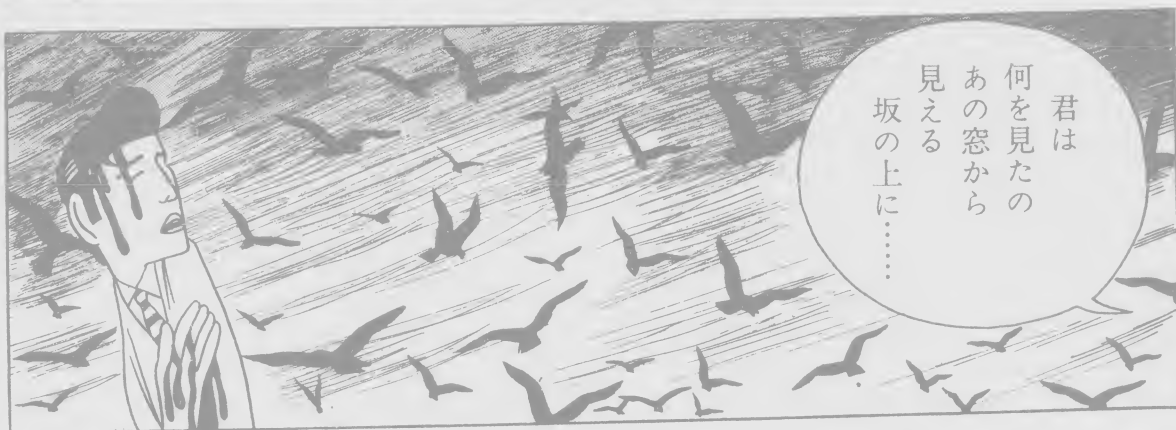
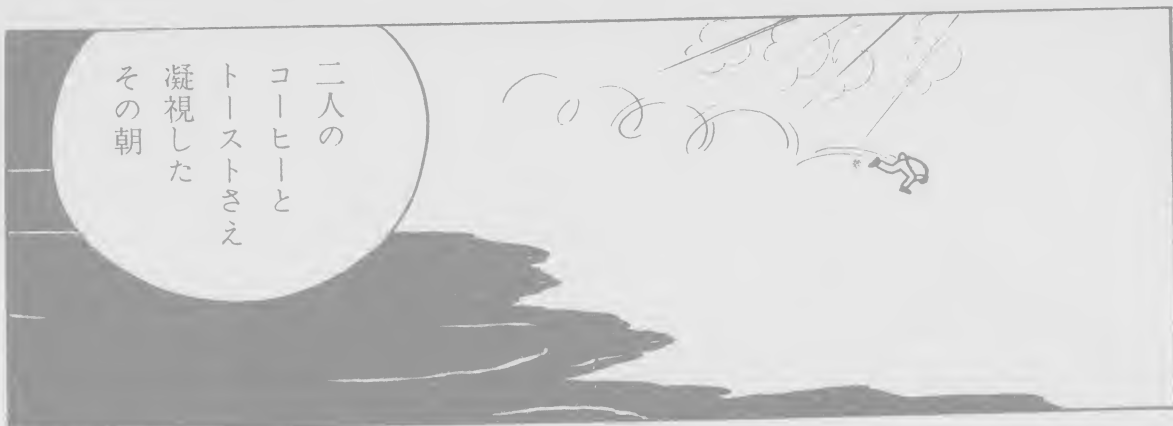
あの日から
私は
私でないの

ららん　ら　らんら
らんな——
うえい

もえる〜
せい
かし〜ら〜

すべては
落日の中に
ぬりこめられ
それ自体
幸せ色の
光りをはなつ
終

バイセクシャルなフェロモン

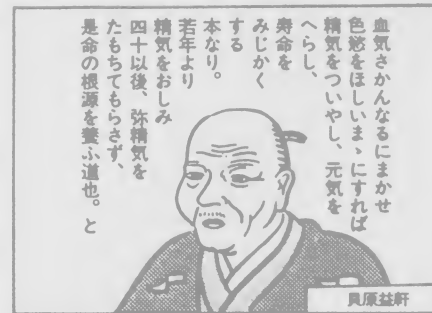
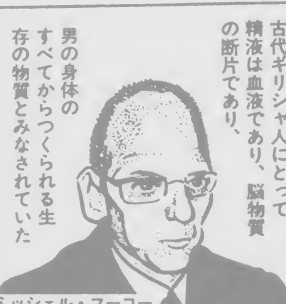
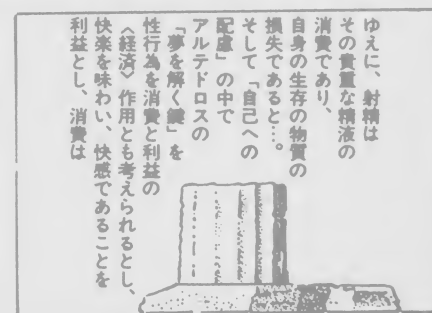
内田春菊

先月号のガロに書いてあったけど、「フェロモンが強くてクラッとする林さん」とはほんとにうまい言い方だ。林さんとお話ししていると、なんだかヨーロッパ男と話しているような気になる。それはルックスもだけど、ものの考え方とか、いろんなことで。それに、林さんのフェロモンは男にも効くみたい。男ともだちに紹介すると、みんな林さんを好きになる。いろんな人を引きつけてしまう人なわけだけど、林さんご自身も、同じように何にでも引きつけられていくところを持っておられるようだ。どんな話題を振っても話をどんどん広げて、面白くしてしまう。すごいことだと思う。男が妊娠する話から、ラッキー池田さんの振り付けの話まで、今まで林さんが「そんなの他人事」って顔をしたのを一度も見たことがない。お話するたんびに林さんの口からは上質な設定やネームがもったいないくらいぽろぽろこぼれ落ちてくるので、おーい誰か録音してくれーという気持ちになる。

でもあの「短くて濃くて歌ってるネーム」は、そうやって生まれているんでしょうね。

夢二を出してくるのはすでに野暮かもしれないが、私はこないだまで彼が作詩やデザインもしていたことを知らなかったもんで、知って驚いちゃって。清順監督の『夢二』を二度見て、画集も買って好きになっちゃったんですよ。あがた森魚さんという巫女に『赤色エレジー』を歌わせた作品の力には、宵待草を始め沢山作詩をしていた夢二と似た空気を感じてしまうわ。まあ夢二がやんなかったことを林さんは山ほどやっているけれど。デビューしたばっかりの頃、私の絵をCMのアニメに使おうというプレゼンテーションを最初にしたのも林さん。私の6畳1DKな当時の仕事場に訪ねて来てくださり、初めてお会いしたのであった。今でこそCMの仕事もあるけど、その頃日本中でそんなことを思いついたのは林さんだけだった。おうそうじゃ(ねじ式…)、『赤色エレジー』が新装版になるそうで、嬉しい。あがたさんの映画の公開のとき友人にあげようとさんざん探した。映画も面白かった。この文章の依頼が来たときは、ちょうど『花ちる町』を読み返していた。『グッピー』に影響されてフーコーとかも買っちゃいましたよあたしゃ。『グッピー』も何度も読んでる。何度も読むほど面白いので、みんなもそうするといいと思う。

こないだは上の娘さんが珍しく化粧をしたら、私と感じが似てたと言われて嬉しかった。奥さんが粋な美人で、いつもすてきなお着物で、そんでもって林さんのことを「静一」と呼ぶのもかっこいい。

それは男を身動きできない状態にして、精液を膣から流れ出すのを防ぐ自然のプログラムではないかと推理する。
出して
いいのヨ…。

血気さかんなるにまかせ色慾をほしいまゝにすれば精気をついやし、元気をへらし、寿命をみじかくする本なり。若年より精気をおしみ四十以後、弥精気をたもちてもらさず、是命の根源を養ふ道也。と
貝原益軒

ゆえに、射精はその貴重な精液の消費であり、自身の生存の物質の損失であると…。そして「自己への配慮」の中でアルテドロスの「夢を解く鍵」を性行為を消費と利益の〈経済〉作用とも考えられるとし、快楽を味わい、快感であることを利益とし、消費は

性行為に必要なエネルギー、生命に不可欠なあの貴重な物質たる精液の損失と、それにともなう疲労であると。
日本張形考より
男って
ケチね！
ドス
ドス

●『pH4・5グッピーは死なない』より（青林堂刊・定価1800円）

「赤色エレジー」は漫画のホームラン王です

あがた森魚

●**ある新聞の人生相談から**

1968年頃。新聞の人生相談の欄に、ある女性から次のような相談が寄せられていた。

彼は売れない画家のタマゴですが、私達二人は親の反対を押し切って同棲しています。生活は乏しく、内職をしたり、時には質屋通いをしたりしながら、生活をしています。それでも彼と一緒にいることだけで、将来の夢を語りあうことだけでとても幸福な気持ちになります。けれども、この頃、いつまでこんな生活が続けられるのかしら……と不安になります。どうしたらいいでしょうか……。

僕はその時18才で、まだ童貞だったし、同棲などというものをイメージしたことさえなかったので、何とはなしにこの記事が目に入ったとき、また一つ子供の世界には無いものを見てしまったような気がした。

しかし、それは、決して見てはいけないものを見てしまったような不快な感触ではなかった。ましてや、年端のいかない若い男女が二人っきりで暮してエッチだなあ〜って気持ちがしたわけでもない。

なんかわかんない。僕には大人めいた恋愛も性的体験もなんにもなかったが、たったそれだけの記事で、この二人はこの世の中で一番幸福な恋人同志ではないかとさえ思えた。そして、僕も誰かと出会うなら、こんな、純粋な恋愛をしたい……とさえも思った。

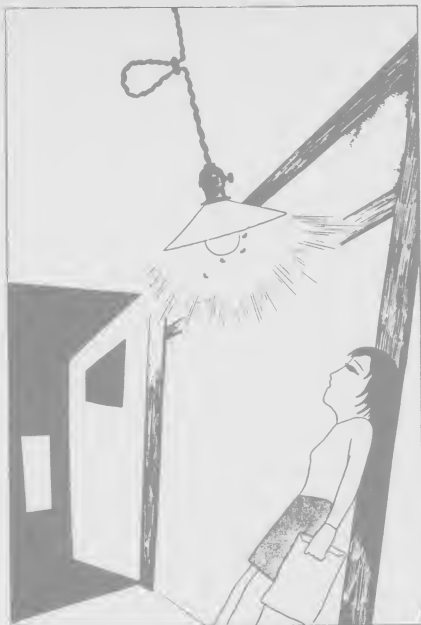
その人生相談の答には、早くその画家のタマゴと別れて建設的に生活をやり直しなさい……とあったと思うが、僕は、その答に反感を覚えたほどだった。

それから、三年後の1971年、林静一の「赤色エレジー」に出会った時、突然その人生相談の記事が蘇えった。そして、僕が、世のどんな幸福そうな恋人同志よりも幸福だと思った画家のタマゴの恋人同志に描いたイメージが、あまりにも鮮やかに、その「赤色エレジー」の中に描き切られていたことに、本当に本当に感動を禁じ得なかったのだった。

そして、僕は、画家のタマゴになることもなかったし、「赤色エレジー」の幸子や一郎のように生きることも出来なかったが、僕はそれを歌うことによって成就させた。僕は本当に幸子や一郎のようになりたかったのだ。だからそれを歌えたことは本当に幸福だった。
　その歌のおかげでその創作者林静一さんにも出会えたし、一郎の同僚だったかもしれない、現実のアニメーターの方々とも出会うことが出来た。
　ある時、あるアニメーターの方が、林静一さんの「赤色エレジー」は確かに素晴らしい作品だけど、ああも清貧でやるせなく生きているアニメーターなんて現実にはいませんよと笑いながら言った。僕にはその告白すら嬉しかった。すべての現実は超越されるために存在しているのだ。次の時代をめざして疾走する若者達に時代を超越すべくイマジネーションを投げかけてくれた林静一は、現実を超越しようとする幸子と一郎の物語りを描き出してみせてくれたからこそ凄かったのだ。

●ついに漫画は動き出した

　林静一のアーティストとしての重大な魅力の一つは、事象を客観視する力のすごさだと思っている。
　僕は「赤色エレジー」という作品、そして林静一というアーティストから実に多くを学び、形容しきれないほどの恩恵を受けたが、中でも重大だったのは、対象物を客観視し表現する意義と手法とを学んだことだったと思う。実に実にその手法は斬新で、一見相入れないような素材を大胆に組み合わせていく。例えればエルンストのコラージュ、デュシャンのオブジェ達を将に漫画的キッチュ、サイケ、ポップに置き換え、これでもかこれでもかと叩きつけてきたようなものだったからだ。
　仮に、Aが写実的ストーリーで、A′が漫画映画的書割性、人工性、ポップさ、パンクさ加減をカウンターするものとすれば、林静一の手法はAに対するA′の浴びせ方が実に鮮やかだった。
　例えば、

A　給料のよくないアニメ・プロに入ろうとする一郎をいさめるインク壜
A′　殴られたインク壜は手袋になって鉄条網に鎮魂する
A　二人のアパートの60W電球に纏わりつく蝿
A′　それを視つめる睫毛の大きくカールした幸子の巨大な眼
A　暗いアパートの部屋で机に向う一郎
A′　帰って来た幸子の燈す電燈からしだれ落ち乱舞する残光
A　絶望と思慕とから　むさぼるように抱き合う二人
A′　レタリング・ロゴ「中卆」「者が」「成功」「する」「条件」
A　一郎の父　焼酎あおって手首切る
A′　ジョルジュ・メリエスの黄緑顔の月が赤い泪流す

A　再び一郎の父　安全剃刀で手首を切る
A′　椿の花韋一つ　蜥蜴一匹振り返る
A　もう一つふとん買おうね　と幸子
A′　桜は吹雪き　稲妻閃光する中マンガ書きたいと机に向う一郎

A　荒川さん残業？ねっ行こう仕事いいじゃない　と幸子
A′　よし行こうか…と波打つ群青の大海に荒川の手は鉄を投じる

まさに漫画映画（動画）的なのだ。青春哀話の、白黒の劇画なのに漫画映画のようにサイケでパンクだったのが驚きだった。作者自身が東映動画に身を置いていて得た手法であろうが、藤圭子や高倉健の歌がピッタリの青春演歌にジェームス・ディーンやキングコングのブロマイドを挿入し、アニメで食えない漫画で売れないそれでも「俺！マンガ書きたい！」一郎と幸子の物語りが、林静一のペンによって、あたかもコマ落ち状の動画的ポップ動きだしたのは漫画史上の幸福な一大事件だった。

●タッチとダッシュの応酬

そして、その手法は、稲垣足穂の「タッチとダッシュ」の論理と妙に合致さえするのだ。いや、妙に合致させたいのは、私の嗜好と希望のせいなのだが……。

つまり足穂言うところのタッチとダッシュとは日常的、生活的、肉体的、自然主義文学的雰囲気を指してタッチ（がこまやかである等々）と称し、それに対しダッシュとは「今後における私たちの〈超越〉は、身につきまとう無数のタッチをぬぐい去っていくところにこそ存する」とくる。

つまり、自然主義的具象性から人工的でダダイスティックな抽象性への移行をこそ足穂は主張しているわけだ。足穂はそれを「ある風景がAならば、映画に現われたその同じ風景はA′である」とも説明している。つまりリアルな原風景はA（タッチ）であり映画に映された風景はA′（ダッシュ）だというわけなのだ。

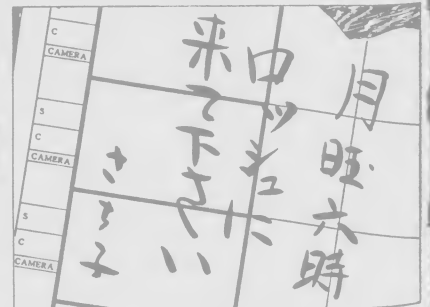
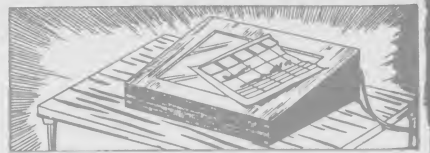
それで、僕はこう想う。〈超絶〉されるべきAあってのA′であろう、と。表現とは限りなく、A′へと向けて疾走されていくべきものであるが、その原形であるAとA′とは結局は並列なものなのではないか……と。

それは足穂言うところの「ある物はある物自身たった一つしかないという自然界の法則下におかれることは、なんとしても堪えがたい」という理屈とも矛盾するものではないだろう。現実Aから対象化されたものがA′とすればA′から対象化されたものが再びA自身であってはならないだろうか。

まさに、林静一というアーティストの最大の魅力は事象を対象化する時の、AとA′を交錯させる時の、洞察力とバランス感覚の見事さなのだ。

●絶対的に孤独から遠く

ところで、僕の音楽を聞いてボブ・ディランをイメージする人はあまりいないだろう。そして確かに宿命そのものだった「赤色エレジー」というキーワードはあっても、林静一の世界と僕の音楽世界とが必ずしも合致しているわけではない。

しかし、奇しきと言うしかないが、ディランを聞かなければ音楽を始めなかったし「赤色エレジー」を読まなければ歌を歌い出さなかっただろう。最初に僕は「蓄音盤」という未熟なアルバムを作ったが、次に「赤色エレジー」を作ったことによって、僕の創作力は急上昇したのは何故だったのだろう。「赤色エレジー」なしに歌い出せなかったというのが仮に誇張だとしても、その一曲が無ければ、僕はこんなにも長く歌ってこれなかっただろう。

●図版は全て『赤色エレジー』より

今回、林静一さんの特集に何か書くに当って、久しぶりに「赤色エレジー」を読み返して、胸の内でむせぶ嗚咽を禁じえなかった。
それはつかのまある時代の青春像を切り取った作品だったのさ……などという言葉では決して終らせることのできる代物ではない、という再認識であった。
「月曜六時　ロッシュに来て下さい
　　　　　　　　　　　　さち子」
アニメのカット表の切れ端しに、さち子が記した置き手紙に一郎が次のシーンを演じる。
cut1「あ…　あいつ！」と驚きと放心
cut2　ドスンとフトン脇にへたり込む
cut3「来たんだ」と驚喜し、天井を仰ぎそり返る
cut4　そのまま驚喜のあまりドンと背中から倒れる
cut5「ここへ…」と顔に手を当てごろりと……
cut6　嬉しさのあまり四つんばいになって畳を叩く
cut7「来たんだ！」祈るように左右の手を握り合わせ
cut8　ありあまる喜びを抱きすくめるかの様に左右の肩を抱きしめうちふるえる一郎……

そして次のページには別れが待っていたのだが……。
人間という他愛なさ、ましてや青春というとけなさ心もとなさをこうもシンプルに、イノセントかつストイックに描いてくれた林静一に僕はありがとうと言いたい。このワンシーンをのみ言いたいのではない。この幸子と一郎の物語りのみを言いたいのではない。たしかにここにナゼか生きて存ることの確信と心もとなさとを確かに確かに関知している林静一がいるよ、一郎がいるよ、幸子がいるよ、ここにもここにもまたいるよ……と教えてくれたことが嬉しかったのだ。
誰もが恐らく……超絶した孤高でありたいのと同時に、将に〈ある物はついにある物自身たった一つしかないという自然界の法則下におかれることは、なんとしても堪えがたい〉存在であるからなのだ。

☆　☆　☆

「赤色エレジー」に出会った頃のノートの片隅に次のような走り書きをしたものだ。
「一番すばらしい絵や音楽は、一番すばらしい絵や音楽を観たくて聴きたくてたまらない人の処へやって来る」
この僕もまた明らかに、幸子や一郎の存在によって、かろうじて孤独を癒していた一人だったといえるのです。
そんなこんなの「赤色エレジー」が歌としてデビューした1972年から、あっという間に、20年もの時が過ぎさったというわけです。

現代の浮世絵師

高橋克彦

一九七六年の夏。

私は林静一さんの仕事場を訪ねた。なにしろ古い記憶なので場所がどの辺りだったかまったく覚えていないが、一階には洒落た喫茶店があって、そこで一時間近くも相手をしていただいた。私にとっては終生忘れることのできない幸福な時間だった。

訪ねた目的は、その翌年の春にドイツのデュッセルドルフで開催される世界漫画見本市に林さんの「紅犯花」を出展させて貰えないかという交渉だった。当時付き合いのあった人間が見本市への出展の権利を獲得し、出品する作品の選定をマンガ好きの私が受け持っていたのである。なるべく日本的な作品、あるいはそのまま世界に通用するもの、しかも、出品作品には英語の翻訳を義務づけられているので長編は避けてくれ、という制約の中で私は十本の作品を選び出した。出展についての交渉はその人間が行なうということになっていたが、水木しげるさんと林静一さんのお二人に関してはぜひとも私にさせて欲しいとお願いした。そういう用件でならお二人とも会って下さるだろう。お二人は私にとって憧れの作家だったのである。かりに見本市への出展を断られても、会うことができる。

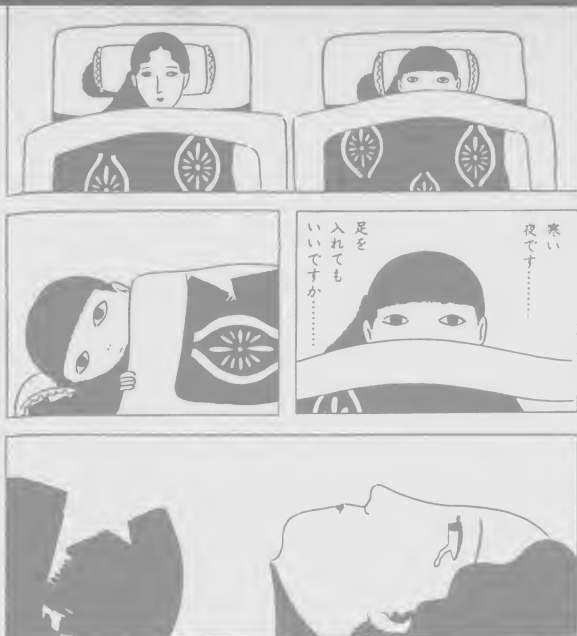
最初に電話で打診したところ、林さんは快く訪問を許して下さった。当日、私は、まさに胸が潰れそうな緊張で訪ねた。林さんは気さくな笑顔で私を迎え入れ、すぐに喫茶店に誘ってくれた。本当は真っ先に話したいことがいくつもあった。「赤とんぼ」を見て泣いたこと、「山姥子守唄」と浮世絵との類似性、「巨大な魚」のやり切れない寂しさ、そしてもちろん「紅犯花」の比類ない美しさ……だが、その日の私はファンではなく編集者の肩書きで訪ねている。林さんも仕事なので会って下さっているに過ぎない。私は自分を殺して見本市の話だけに終始した。「紅犯花」の場合、ほとんど文字がない。その意味では翻訳も不要で、このまま出展も可能なのだが、できるなら著者である林さん自身による解説が戴けないだろうか、と私は懇願した。そうすればもっとよく外国の人々にも理解されるだろう。

しかし、実を言うとこれは私の権限を超えていた。私の役目は、とりあえず出展許可を貰うことだけで、それ以外については会社の方で折衝する約束になっていたのである。それを承知していながら私は依頼した。あの難解な「紅犯花」が、どういう意図で描かれたものなのか、なんとしても知りたかったのだ。絵の美しさは分かるものの、私には背後に潜む哀しさが気になっていた。林さんは「解説ですか」と一瞬躊躇されたが、私の懇願に負け、短くてもよければ、とおっしゃって引き受けて下さった。

およそ一ヵ月後、待望の原稿を頂戴した。その原稿は今も私が大切に保管している。原稿を一読して私は自分の未熟さを知らされた。林さんがどれほど周到に章立てして全体を構成していたのかが、私にはまるで見抜けなかった。哀しみは理解できても、

月刊ガロ68年9月号『山姥子守唄』より▲

月刊ガロ68年10月号『花ちる町』より▼

◀月刊ガロ68年6月号『赤とんぼ』より

それがなにからくる哀しみなのか気付かずにいたのだ。葬儀に列席している子供が、だれの死なのかも理解できず、それでも本能的な哀しみを察知して泣くことがあるけれど、つまりはそのレベルで「紅犯花」を解釈していたに過ぎない。もっとも、ここでは林さんの線について書こうと思っているので「紅犯花」の意味についてはこれ以上深入りしないことにする。ただ、この林さんの原稿を読んだことで、私の中の林さんはますます超えることのできない巨大な存在となった。他の作品についても私は未熟な解釈をしていたのではないかと不安に駆られた。たとえば「巨大な魚」に登場する「おとう」がアメリカ資本主義の象徴だったのだと気付かされたのは、これがあって再読したときのことだ。線があまりにも日本的な叙情に彩られているため、その背後に痛烈なアメリカ批判（と言うより日本批判）が隠されているなど、まったく考えもしなかった。この作品は「山姥子守唄」とおなじところに位置するものであったのだ。この視点で眺めれば「赤色エレジー」とて、単なる個の不幸ではなく、日本の不幸そのものを描いた作品とも取れる。赤色の赤は日の丸の赤だったのではないか？　だれもそれを指摘しなかったのは、あがた森魚君が「赤色エレジー」を歌ったことにより、徹底した個の物語のイメージを定着させてしまったからなのかも知れない。

▶『赤色エレジー』より

線について言及すると口にしながら、どうも別の方にばかり逸れている。

そもそも私が林さんの作品に魅せられた一番の理由は陰影のほとんど見られない白日夢的な表現にあった。子供マンガの世界には杉浦茂さんを筆頭に、こういう描法をする作家がたくさんいる。しかし、劇画がブームとなり、特に白土三平さんを看板にしていた『ガロ』に於いては、林さんの線は異質で、しかも輝きを発していた。私が浮世絵の研究に専念しはじめた時期と林さんの登場は重なっている。あ、これは浮世絵じゃないか、と感じた。ストーリーよりも絵が先行している。凄い人が出てきたものだ、と素朴に思った。頁のすべてに美意識が貫かれている。私は舐めるように一コマ一コマ眺め、気に入った絵を模写した。打ち明けると私は物書きよりもマンガ家を目指していた。こんなマンガ家になれたら最高だろうな、と林さんの天才を羨んだ。なにも描かれていない空白に、万感の思いを表現できる作家である。例えば「花ちる町」の最終頁には巨大な空白の中に小さく三人が配置されている。私たちは最初に三人の表情を確かめ、続いて三人が置かれている空間の無限の広さを感じとる。とてつもなく気怠く、やるせない時間がそこに存在している。この時間と空気とを説明するのに、文章ではいったい何枚の原稿用紙が必要だろうか。いや、たとえ何十枚を費やしたところで完全には伝え切れないはずだ。感情の起伏の少ない線だからこそ可能にした場面だと私は思う。

マンガが小説を超えたと言われて久しいけれど、その先鞭となったのは林さんだと私は信じている。ここで強引な補足をするなら、浮世絵師は最初、読本や黄表紙という絵物語の画家としてスタートする。力を蓄え、あるいは人気を博すと、絵師は文字のない一枚絵（いわゆる浮世絵）の製作に力を注ぎ込む。文字の説明などなくても通用する作品を手掛けるようになるのだ。林さんに対して、浮世絵師のようだな、と感じた私の直観は当たっていた。林さんはその後、一枚絵の作家として多くのファンを獲得している。まさに林さんは現代に甦った浮世絵師なのである。